

私の工夫

英語を「使う場」を仕掛ける
―ゴール・必然性・繰り返しで
生まれる言語活動―

県立倉敷青陵高等学校

指導教諭 桐野 隆江



1 はじめに

私はこれまで、「世界に出て
日本人としての誇りを持ち、英語
で自分の考えを伝え、自らの道を
切り開く力を育てたい」という思
いのもと、試行錯誤を楽しむ言語
活動を重視してきた。

新課程のもとで三年間、同一学
年を持ち上がりながら授業を行う
中で、「英語で何ができるように
なるか」というゴールを生徒に明
確に示し、生徒が英語を使う必然
性をもつ場を意図的に教師が設計
することの重要性を実感している。
単元の冒頭でゴールイメージを共
有し、「なぜ」「誰に」「何を伝え
るのか」という目的を意識させな
がら、社会的・現実的な題材を通し
て繰り返し言語活動に取り組みせ
ることで、生徒は英語を単なる知
識としてではなく、「思考と表現
の手段」として捉えるようになって
いった。

本稿では、こうした授業づくり

を「ゴール」(必然性)「繰り返し」の
三つの軸から整理し直すとともに、
生成AIを活用した新たな展開も
紹介したい。

*外国語科の学習指導要領における「言語
活動」とは、「実際に英語を使用して互
いの考えや気持ちを伝え合う」活動を意
味する。

2 授業デザインの三つの軸

(1)ゴールの明確化―「英語で何
ができるようになるか」を共有
する

単元冒頭で最終ゴール(タスク)
を提示し、到達点を具体化するこ
とで、生徒は学びの方向性を明確
にできる。初回に同様の活動を体
験させて難しさを実感させると、
「次はこう言えるようになりたい」
という意欲が生まれる。ゴールの
明示は、学習内容に興味をもたせ、
自律的な学びを促す起点となる。

(2)必然性のある言語活動―「な
ぜ英語を使うのか」に納得でき

る場面設定をする

英語使用の必然性をもたせるた
め、目的や状況を具体的に設定す
る。現実的な題材や社会的テーマ
を扱うことで、英語は「教科の中
の言葉」から「現実を表す手段」へと
変化する。発話が活性化し、言葉が
生きたものとして定着する。さら
に、単一の活動だけでなく、活動同
士の連続性にも必然性をもたせる
ようにしている。

(3)繰り返しによる技能の強化
―表現を自分の言葉として定
着させる

言語習得の鍵は繰り返しである。
一度の発話では力はつかない。単
元内、または複数単元を通じて同
じ機能や表現を段階的に繰り返す
ことで、既習内容が再構築され、即
興的に言葉を選ぶ力が育つ。授業
では、対面でのコミュニケーション
時間をどのように確保するかを
常に意識している。

3 英語コミュニケーション での実践例

ポンペイ遺跡や地下聖堂に関す
る英文を読み、自分たちの地域や
学校を象徴するアイテムを未来に
残すとしたら何がふさわしいかを
考える単元である。

(1)ゴールの明確化

「クラスで未来に残す三つのア
イテムを英語での話し合いを通

して決定する」という第9時の最
終ゴールを第1時に提示し、同様
の活動をまずは体験させた(資料
1)。もちろん最初はうまくできな
い。しかし、その「うまくいかない
経験」が「できるようになりたい」
という意欲につながり、同時に「こ
の単元の終わりには英語でどのよ
うなことができればよいのか」と
いうゴールイメージを生徒にもた
せることができた。学習を進める
うちに、生徒は「何を次世代に伝え
たいか」を自分事として考えるよ

資料1 ピラミッドディスカッションを指導計画の中心に位置づけた例：
“What items would you place in a time capsule?”

Day 1	ピラミッドディスカッション (モデル提示) Who should choose the item that will go into the time capsule? and how?
Day 2	If your room were discovered 100 years from now, what would tell people the most about you?
Day 3	What current item might be misunderstood by people 100 years in the future?
Day 4	Which everyday habit today might disappear in 100 years?
Day 5	What local place today would surprise people 100 years from now? Why?
Day 6	Which student's idea would best represent today's society, and why?
Day 7	Which 3 genres(e.g. art, science, fashion) best show what kind of people we are today?
Day 8	If future people could see only one thing from our time, what should it be?
Day 9	◎Which 3 items would your class like to put into your school's time capsule?

*クラスや生徒の習熟度に応じて適宜調整

うになり、単なるアイテム選びから価値観の探究へと発展した。

(2) 必然性のある言語活動

「全員での話し合いを通じての合意形成」という目的を達成するため、中心となる言語活動としてピラミッドディスカッションを採用した。個人↓ペア↓4人↓8人↓全体へ



資料2 ディスカッションの授業風景

と段階的に意見を広げ、全員に発言の機会を保障した。ペアで話した内容を次のグループで伝える中で表現が洗練され、議論の質も高まった。「制服は学校の象徴」と主張する生徒に対し、「文化祭の雰囲気こそ残すべきだ」と反論が起るなど、価値観の違いを英語で調整する姿も見られた。こうした対話を通して、「相手を納得させる言葉」を選ぶ力が育った。

(3) 繰り返しによる技能の強化

技能の定着を図るため、「身の回り」→「地域」→「文化の象徴」と抽象度を高めながら(資料1)繰り返し発話させた。意見を述べる際に使用可能な表現は振り返りシート裏面にまとめ(資料3)、必要に

資料3 生徒の振り返りシートの一部

Day	ねらい(目標)	主な言語活動	達成できた点	次に向けての改善点
1	Edna と Jun が校長先生の発表についてどのように感じているか聞き取ろう	リスニング ピラミッドディスカッション		
9	Pyramid Discussionを通じて「学校のタイムカプセルに入れるもの3つ」をクラス全体で決定しよう	①ディスカッション		
10	学習した成果を振り返ろう	②単元末テスト		
評価基準(主体的に学習に取り組む態度)				
A B C				
ディスカッションを通じて、 クラス全体で 一つの結論を出そうとすることができた				
ディスカッションを通じて、 グループ(4人×2組)で 一つの結論を出そうとすることができた				
ディスカッションを通じて、 4人グループ内で 一つの結論を出そうとすることができた				

Pyramid Discussion Expressions
0. What is your top pick? (選択を尋ねる)
1. Giving your opinion (意見を述べる)
☐ I think we should include ~ because... ☐ In my opinion, ~ is a good choice.
☐ I believe ~ represents our school/culture/future. ☐ I think this item represents our school because...
6. Suggesting alternatives (別の提案をする)
☐ What if we choose ~ instead? ☐ Maybe we could think about ~. ☐ Another idea is ~.
7. Summarizing / Reaching agreement (まとめ・合意形成)
☐ So, we all agree on ~, right? ☐ So, we are going with ~. ☐ Our group thinks the best items are ~ and ~.
☐ Let's decide on ~ because everyone supported it.

今までディスカッションで使ってきた表現⑥、⑦を使いこなして、結論を出そう！

4 AI活用による学びの個別化と表現活動の変化

授業目的に応じて生成AIを支持

応じて参照できるようにした。生徒は同じ構文を繰り返し使う中で語彙や論理構成を自分のものとし、即興的に意見を調整する力を伸ばした。最終日の合意形成では「英語で本気で考えた」という感想が多く、学びの充実感が見られた。

援ツールとして活用している。論理・表現Ⅲにおける英作文指導では ChatGPT を使い、内容・論理構成と表現について即時フィードバックを得られるようにした(資料4)。生徒からは「すぐに返ってくるのが励み」「もっと良く書き直したい」「次は満点を取りたい」といった声が多く、意欲の向上が見られた。教師側も添削負担が軽減され、机間指導により集中できるようになった。

資料4 教師による自由英作のプロンプト例

あなたは、高校3年生を担当する経験豊富な英語教師です。論理表現の授業で、生徒が書いた自由英作文に対して、内容・論理構成と表現の観点から丁寧に添削してください。

【観点と条件】内容・論理構成:主張・理由・例・結論が明確で、論理的に展開されているか。改善点があれば、修正文を提示・表現:文法・語法・語彙・スペルが自然か。修正箇所を太字で明示して示す。

・アドバイス:次に同様の課題に取り組む際に意識すべき学習のポイントを、具体的かつやや詳しく書く。模範解答は不要。コメント中心のフィードバックとする。

【出力形式】1.Content & Logic Feedback(内容・論理構成に関するコメント・10点満点)2.Expression Feedback(表現に関するコメント・10点満点)3.Advice for Next Writing(次への具体的なアドバイス)4. Overall Evaluation(総合評価・20点満点)

【課題文】次のテーマについて、60~80語の英語で書きなさい。新たに祝日を設けるとしたら、あなたはどのような祝日を提案したいですか。その祝日の意義は何か。また、なぜそのような祝日が望ましいと考えるのか。

(ここに自分が書いた英文を貼りなさい)

一方で、AIに依存しすぎると考える力が育ちにくく、内容の正確性にも注意が必要である。そこ

で「自分で考え↓グループで練り↓AIで確認↓全体共有・教師の助言」という流れを定着させている。AIの導入目的を明確にし、生徒自身が効果を実感できる設計が鍵である。

5 おわりに

本実践を通して痛感するのは、教師が「英語を使う意味のある場」を意図的に設計することの大切さであり、そこに授業づくりの面白さと難しさがあるということだ。まずは教員間で、生徒にどのような力を育てたいのか、そのためにどのような授業を構築すべきかを共有することが欠かせない。その上で、言語活動をいつ、どのように位置づけるか、どの時間を充てるかを共に考える中に、教師の学びと喜びがある。

AIの活用は個別最適化を可能にし、学びの幅を広げるが、英語教育の中心にあるのは、やはり「人と人の対話」である。言葉を通して他者とながら、共に考える喜びを実感できる授業を大切にしたい。AIと人の力が補い合い、生徒が自ら考え、伝え、学び合う場を創ること——そこに次の時代の英語教育の可能性があると考える。今後も先生方と共に授業を創り、学び続ける教師の姿を生徒に示していきたい。